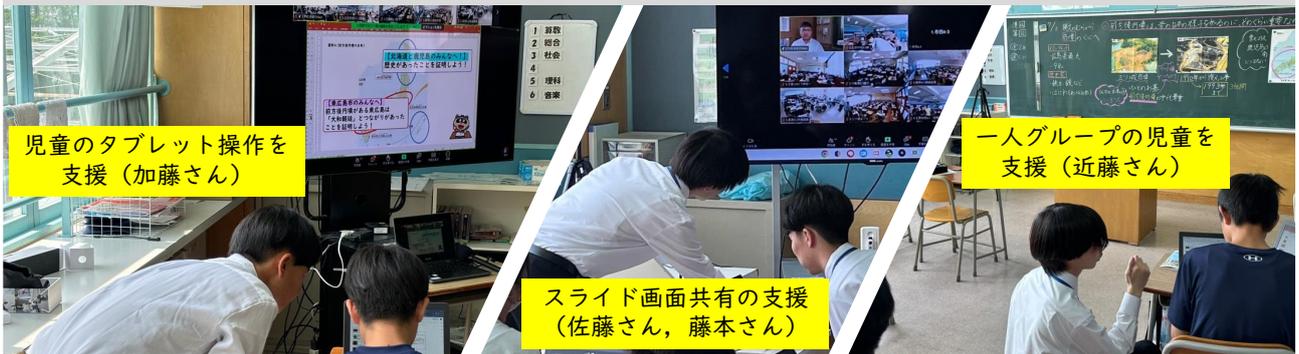


北見中央小学校が参加した広域交流型オンライン社会科学習に  
社会科教育実践分野の学生が支援員として関わりました

【サムネイル画像（児童の顔マスク処理済）】

広島県や鹿児島県の小学校とZoomでつながる第6学年・広域交流型オンライン社会科学習  
「縄文のむらから古墳のくにへ：大きなお墓、この価値を説明する鑑定書をつくろう」



【ICT・学習支援スタッフ】

左から社会科教育学ゼミ3年の加藤公悠さん，人文地理学ゼミ3年の近藤璃空さん，日本史ゼミ3年の佐藤朝陽さん，社会科教育学ゼミ3年の藤本莉央さん

hue 国立大学法人 北海道教育大学 釧路校 北海道地域学習用動画コンテンツ  
社会科教育実践分野 玉井ゼミ 「古代のお墓：北見・常呂遺跡」

北見・常呂遺跡で見つけた「お墓」に注目！

1500年前，北見にはどんな人が!?

北海道教育大学  
釧路校



玉井 慎也 先生



北見市立中央小学校



林 賢汰 先生 齋藤 廉 先生

## 【本文】

2024年7月3日(水)、広島県・鹿児島県・北海道の小学校、合計8校15学級がZoomでつながる広域交流型オンライン学習・第4学年「縄文のむらから古墳のくにへ：大きなお墓、この価値を説明する鑑定書をつくろう」(2時間)が実施されました。北海道からは、北見市立中央小学校が参加し、第6学年の齋藤廉教諭、林賢汰教諭に実践協力をいただきました。

本授業には、北海道教育大学釧路校・講師の玉井慎也先生(社会科教育学ゼミ)や社会科教育実践分野・日本史ゼミ3年の佐藤朝陽さん、人文地理学ゼミの近藤璃空さん、社会科教育学ゼミ3年の加藤公悠さん、藤本莉央さんが北見市立中央小学校で学習支援員として関わりました。学生がどのような学びを得たのか、以下で共有します。

こうした実践的な学びを釧路校の学生に提供してくださった北見市立中央小学校の齋藤廉教諭、林賢汰教諭をはじめ、遠隔でつながった学校の先生方、そして広域交流型オンライン学習をコーディネートしている広島大学教育ビジョン研究センター(EVRI)のスタッフの皆様に感謝申し上げます。なお、本授業の指導案や授業記録、ハイライト動画(約10分×2本)は、EVRIの公式HP、YouTube公式チャンネルにアーカイブ化されております。併せてご覧ください。

## 【指導案や授業記録】EVRIの公式HP

[https://sip-dcc.hiroshima-u.ac.jp/class\\_practice/20240703/](https://sip-dcc.hiroshima-u.ac.jp/class_practice/20240703/)

## 【授業実践のハイライト動画】EVRI公式YouTubeチャンネル

1時間目：<https://youtu.be/fuimvvxluMc?feature=shared>

2時間目：<https://youtu.be/yVLfI4-YLEM?feature=shared>

## 広域交流型オンライン学習

「広域交流型オンライン学習」とは、広島大学教育ビジョン研究センターが2021年度より東広島市教育委員会と連携して実施されてきたプロジェクトです。2023年9月、内閣府が実施する「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」の第3期「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」の採択を受け、「デジタル・シティズンシップ・シティ：公共的対話のための学校(通称：NICE)」プロジェクトとして発展しております。NICEプロジェクトを含む「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」の採択課題は、いずれも研究開発の成果を北海道に実装することを最終ミッションとしています。



北海道教育大学釧路校では、へき地小規模教育研究センターが中心となり、遠隔教育を実践できる現職教員や教員志望学生の力量形成を支援しています。その一環で、釧路校・社会科教育学研究室の講師・玉井慎也先生は、広島大学教育ビジョン研究センターと連携しながら、NICEプロジェクトに北海道の学校が参加できるように支援したり、広域交流型オンライン学習を観察・支援する釧路校の学生の成長を調査したりしています。また、令和6年度・へき地小規模校教育研究センターの研究助成を受け、「北海道内のへき地・小規模校を繋ぐ広域交流型オンライン社会科学習に向けた地域教材動画の制作」に取り組んでいます。

## 【佐藤朝陽さん】

今回広域交流型オンライン学習に支援という形で参加しました。そこでは、機材の接続の方法を学んだり、実際の児童の学習の様子を観察・支援したりしました。これらの活動から、広域交流型オンライン学習の「よさ」と「難しさ」を発見することができました。また、「北海道」の地域性に着目して、北海道で広域交流型オンライン学習を実施する意義を考えました。

まず、広域交流型オンライン学習の「よさ」は、実感を伴った学習ができる点があると考えました。今回の北見中央小学校の児童の実態としては、古墳というものが身近なものではなく、今も現存していること、どうして存在していたのかという歴史的意義の理解が薄く見えました。しかし、今回の授業を受けて、のん太アンケート3を行う際に児童が「古墳は大和朝廷の歴史を～北海道の歴史はお墓とか土器とかあるからそれで分かる」というような発言をしており、古墳から分かる大和朝廷と関連した歴史と、北海道に残る史料から分かる歴史の違いを比較しながら理解しているように見られ、古墳が存在した・している歴史的意義の理解は向上したように見られました。

その背景にはリアルタイムの映像で東広島の三ツ城小学校の近くにある古墳を見ることができたことが影響していると思います。リアルタイムの映像は教科書の写真よりも生な情報であるため実感を伴いやすいように感じます。また、小学生にとって身近なものである学校から直接古墳を見られるという事実は、北海道の児童にとって新鮮なものだと思います。そして、今回北見中央小学校の児童たちの使う社会科の教科書には北海道や沖縄は地図に載っておらず、大和朝廷が支配を広げていた時に、それらの地域の歴史は存在しないかのように捉えることもできるということがありました。しかし、今回の授業のようにその土地の児童たちが歴史を紹介しあうことで、大和朝廷の歴史がつくれている中で、北海道でも歴史がつくられていることが教科書のみを使うよりも理解しやすいようになっていると感じました。

次に、広域交流型オンライン学習の「難しさ」は、接続のトラブルにどう対応するかだと考えました。今回の場合は最終盤で音声トラブルが見られ、以前観察した5月期の授業では、のん太アンケート（Google フォーム）に入れないというトラブルが見られました。この問題に関しては、いつも同じことが起こるわけではなく、予測が難しいので、教室の教師らは不測の事態に対しての対応力や、他の手立てを事前に考えておくなどの準備が必要であると考えました。

最後に、北海道において広域交流型オンライン学習を実施する意義として、北海道という独自の歴史の歩みを進めてきたという地域性や、広い大地であるため、同じ北海道といっても違う地理的な環境で育ってきている点が挙げられると思います。今回取り上げた常呂遺跡のように、教科書・資料集には載ってはいないが、教材とすることができるものがたくさん地域に存在しており、北海道の児童たちが培ってきた常識は北海道内だけでも違うことが分かります。そのため、オンラインでつながることで、社会的事象を多角的に考える力を養うことができると考えました。北海道で広域交流型オンライン学習を実施することは、へき地と呼ばれる少人数学級も多数存在するという実情もあるため、とても意味があると思います。広域交流型オンライン学習には、へき地の児童たちに協働的で対話的な学びを提供する一つの手立てになると思います。今後、北海道で広域交流型オンライン学習に参加する学校・学級が増えれば良いなと願っています。

## 【近藤璃空さん】

私は地元が北見で、今回の広域交流型オンライン学習に北見中央小学校が参加すると聞いて、ぜひ現地で観察・支援してみたいと思いました。現在、人文地理学ゼミに所属しており、今回の広域交流型オンライン学習を「地域間の認識の差」に注目しながらふり返りたいと思います。

今回の学習内容は古墳に関する歴史的内容でした。舞台は北見市、東広島市、徳之島でしたが、北見市や徳之島には古墳がなく、古墳を遠い存在であると認識する児童が多くいることが想定されました。逆に東広島市の児童の視点では古墳は身近にあるという認識を持っている児童が多いことが想定されました。

広域交流型オンライン学習においては、通常は関わるのが難しい他地域の同級生と交流したり、古墳などの実際の現場を中継で観察したりすることができます。北海道や鹿児島には大きな古墳が存在しないため、実際の古墳がどのようなものなのか想像がしにくい部分があります。私自身、北見市の出身ですが、小学生のころは古墳がどのようなものか想像しづらかったです。北見市や徳之島は、教科書や資料集だけの知識を備える形になるパターンが多く、それは真正（オーセンティック）な学びとは言い難いと思います。そこで、今回のような知識伝達型ではなく、実際に観察や交流を踏まえた学習を展開することによって、古墳に対するイメージが付きやすく、実際に使えるような真正（オーセンティック）な学びとなると考えました。そしてこのような学びこそ、現在の学習指導要領に示されている深い学びを実現することができる手立ての一つになると考えました。

また、広域交流型オンライン学習においては、同級生との対話や交流が通常の授業より多くなっています。対話の機会が増えることによって、その対話の中で学習内容に興味を持ち、深く学ぶようになっていくという建設的相互作用が発生しやすくなると考えます。建設的相互作用を発生させることによって主体的・対話的で深い学びが実現しやすくなるため、広域交流オンライン学習は建設的相互作用へのきっかけの一つにもなり得ると考えます。

今回の広域交流型オンライン学習は歴史学習でしたが、同時に「地域理解」を深めることにも寄与する授業になっていたのではないかと思います。児童たちは自分たちの地域にある古墳や貝塚、遺跡について改めて学んでいました。また、授業の後半で他地域の学校からのコメントに触れる機会も作られていました。このような事前学習や他地域の学校からの質問を通じた地域の再認識によって、自分の地域について疑問を持ち、学ぶようになっていました。実際、北見市に住んでいた私も常呂遺跡については距離が北見市内から遠いことも相まって深く理解していませんでしたが、今回の交流がきっかけで学ぶ意欲が高まりました。他地域の学校との交流の過程において、地域の魅力などに気が付くことによって自分たちの住む地域理解に繋がり、学習内容の充実に加え、持続可能で創造的な地域社会の担い手の育成に寄与できる手立ての一つにもなり得ると考えます。

今後は、私を含めた釧路校の学生が入職までに一定程度広域交流型オンライン学習のような遠隔授業を運営・実践することができるように、今回の授業観察・支援で学んだことを生かして、教育実習や大学の講義に主体的に取り組んでいきたいです。

## 【加藤公悠さん】

私は、5月に実施された釧路町立別保小学校での広域交流型オンライン学習の支援員も務め、今回の北見市立中央小学校での広域交流型オンライン学習の支援員業務が2回目となりました。学習者のサポートだけではなく、授業者のサポートにも一歩踏み込んだ支援ができた点に、前回と今回の違いがありました。

まず、広域交流型オンライン学習の長所や利点は主に2つあると考えて臨みました。1つ目は、複数の地域や学校と連携して学習できる点です。オンライン学習という名の通り、複数の学校や地域と中継をつないで同じ単元を同じように学習する事ができ、様々な地域性や児童がいるため、多様な意見や考えを交流することが可能になります。2つ目は、児童・生徒に実感を持ってもらいやすいという点です。ただ教科書で歴史や地理を学ぶことに比べて中継などのLive映像により、教科書などの紙媒体だけでは得られない体験や・経験を補えるのではないかと考えます。

実際、北見中央小学校の児童の様子を見ると、古墳について事前に学習していたかは分かりませんが、広域交流型オンライン学習が始まり古墳の上から中継があった際に、集中が切れていた様子も見受けられました。本州や西日本と比較して北海道には古墳がなく身近な存在ではないため、いきなり古墳から中継され古墳の重要度について学習しようとしても、分からない状態なのかもしれないと思いました。しかし、学習を進める中で、広島では小学校から見える位置に古墳があったり地図で分布を確認したりすることで、数多くの古墳が身近に存在している状況であるということが分かり、古墳の詳しい情報や重要度について理解しようとしている様子に変容していました。それまで、北見の児童にとって身近ではなく、関心も低かった「古墳」が、Live映像を通して身近で関心の高い事象に変容していくことは、通常は得られない経験として実践的意義が高いと思います。

次に、広域交流型オンライン学習の短所や欠点は主に2つあると考えて臨みました。1つ目は、機材トラブルです。複数の場所でネットワークを介して授業を行っているため、どうしても機材によるトラブルが付きもので、どのように事前の予測をし、当日臨機応変に対応するかが重要だと考えていました。2つ目は、環境と人員の整備です。広域交流型オンライン学習を実施するには、ネット環境や機材などの学習環境を整えることに加えて、担任だけでスムーズに授業を進行することが難しいのではないかと予想していました。

実際、今回の北見中央小学校での事例では、音声が聞こえなかったり映像が途切れたりする場面がありました。映像が途切れると、児童の集中がどうしても途絶えてしまい、その後の学習に集中できない可能性もあります。この点に関しては、十分承知の上で学習を行っていると思いますが、まだまだ改善の余地があるのではないかと思います。また、玉井先生や広島大学の関係者、さらには私たち大学生などが担任の仕事の一部をサポートすることが今回も複数の場面で見られました。この点に関しては、今後の地蔵可能な学校体制を考えたときに、外部人材だけではなく、担任の先生を含めた小学校全体がこの学習形態に協力姿勢を示せるかどうか、さらには人員を確保できるかどうかが成立条件になるのではないかと考えました。一方、教員志望学生にとって、こうした通常の教育実習では経験できない実践的な学びを得る機会はありませんので、私たちのような学生がサポーターとして入ることは、持続可能な体制の整備の一助になると思いました。

今後も、広域交流型オンライン学習の支援員が募集されていれば、積極的に参加していきたいです。

## 【藤本莉央さん】

広域交流型オンライン学習は、知識伝達型の授業では理解や実感が困難である部分を補うことができると感じました。今回の「古墳」に関する内容の場合、北海道民は古墳が身近にないため学習する際に実感があまり湧かないことが想定されます。しかし、今回のような古墳が身近にある学校と交流する方法を採用することで、北海道で生きる子どもたちにとっても具体的な理解を促すことができるようになると思います。実際、現地と中継したり、東広島市の小学校と交流したりすることで、「日本のどこかの地域について学んでいる」と感じるのではなく、自分事として学ぶことができたのではないのでしょうか。

広域交流型オンライン学習をはじめ、遠隔授業が学校現場で行われる機会が多くなっていると感じます。コロナ禍で急速な広がりを見せた遠隔授業ですが、結果として良い方向に向かっているのではないかと考えています。歴史や地理の授業の場合、身近にないことについても学ぶことは多いため、知識伝達型の授業になりかねない場面が多々あったと思います。しかし、遠隔授業が広まってきているため、そういった単元の学習内容を「広域交流型オンライン学習」のような手法で授業を行うことで、教師も子どもも自分事として単元の学習内容を捉えて教える・学ぶことができると考えます。教授パラダイムから学習パラダイムへとシフトしている今日、こういった学習方法はとても有効的であると感じます。

また、子どもたちは、主体的に自文化の外について学ぼうとすることは決して多くはないと思います。しかし、今回のように文化の違う地域同士がオンラインで繋がる授業形態が確立することで、異文化に触れる機会が増え、自文化から異文化へと越境することができると考えます。「越境」は異文化を理解する上で必要な観点だとゼミ活動でも考えてきたのですが、今回のような広域交流型オンライン学習は、同じ日本に住む異文化圏の人々と交流することで、異文化を理解するきっかけにもなると言えます。自文化圏のみの理解にとどまってしまう場合、「自文化圏（地域）をよりよくしていこう」としか考えないことになりかねません。しかし、異文化へと越境していくことで、同じ日本国内の異文化のすばらしさを体験的に学ぶことができます。そういったことが結果として、自地域を良くしていこうという態度から、日本を良くしていこうという態度、すなわち公民としての資質・能力の育成・涵養へとつながるのではないかと考えています。加えて、ウェルビーイングの深化が行われることで、自文化への愛着を持つと同時に、異文化への関心や愛着を抱かせることができるのではないかと考えています。

上記のように、広域交流型オンライン学習を異文化理解学習として位置づけ、実際に授業の計画・実施・改善をしていくためには、教師が遠隔授業に関心や理解を持つだけでなく、その目的意識をしっかりと持つことが求められると思います。遠隔授業という形態が広がりを見せたのは最近であるため、現職教員の全員に理解を促すことは難しいと思いますが、今回のように、教員志望学生に支援員という役割を与えることで、遠隔授業への理解を促すことができ、何のための遠隔授業なのかを考える契機になると思います。こういった一種の教師教育は、学生にとってとても実りのある体験であると考えます。